

台風シーズンになり、今回も 12 号が四国、本州を直撃しています。外は強風で危ないため、室内でカイコの観察をしましょう。今どうしてカイコかって？それが今回のミニ観察会のテーマです。

## ◆カイコは何化性<sup>かせい</sup>？

昆虫が1年のうちに卵からふ化する回数のことを、化性と言います。チョウなどの種類によっては、春、夏、秋と3回くらい発生する三化性の種類もありますが、カイコは基本的に春1回の一化性です。カイコに最も近い種と言われる野生の蛾<sup>が</sup>であるクワコも同じ一化性です。では、春に発生するカイコの幼虫が、今どうして博物館で飼育されているのでしょうか？



クワコの3齢幼虫

## ◆休眠打破<sup>きゅうみん だ は</sup>

カイコの卵は、室温下では5月中旬にふ化し、4週間ほどで繭をつくり、さらにその2週間後くらいには羽化して成虫になります。そしてすぐに産卵し、成虫は死んでしまいます。卵はその後、休眠状態になります。そのままでは眠ったまま冬を越してしまいますが、農業としての養蚕では、1年に4～6回はふ化させて、春から晩秋まで飼育を続けました。なぜそんなことができるのかと言うと、古くから卵の休眠を打破させる方法が確立していたからです。その方法は、ちょっと乱暴ですが、卵を少し温めた塩酸に浸けるのです。浸酸法と言って、明治時代から行われていました。さらに古くは、江戸時代にも蟻酸<sup>ぎさん</sup>などを使って同じ原理の方法が「秘伝」として伝わっていたそうです。



ふ化したばかりのカイコ

## ◆小さなカイコは人工飼料で

カイコの化性が正確にコントロールできるようになった近代の養蚕では、より効率的な飼育をするため、蚕種（カイコの卵）の生産と稚蚕（2齢幼虫までの小さなカイコ）飼育は専門の業者が行っています。2齢幼虫までは地域の組合などがまとめて人工飼料を使って飼育し、2回目の脱皮をした直後に農家へ配布し、3齢以降をそれぞれの農家がクワの葉を使って繭になるまで飼育しました。人工飼料はようかんのようなペースト状で、やはりクワが主な成分です。これはある程度保存がきき、まだあまりたくさんは食べない小さなカイコを育てるには好都合です。



人工飼料で育てられているカイコ

次回のお知らせ

ミニ観察会：10月8日（土）11時から 新聞No.6も観察会にあわせて発行します。